

§45 正準率換

正準率換

ラグランジアン L をよぎように、ハミルトニアン H も、座標率換

$$(q_1, q_2, \dots, q_N) \rightarrow Q_i = Q_i(q_1, \dots, q_N) = Q_i(q)$$

にたいして不変です。

また、一般化座標 p_i は、ラグランジアンを用いて

$$p_i = \frac{\partial L(q, \dot{q}, t)}{\partial \dot{q}_i}$$

とおぼえます。

$$p_i = \frac{\partial L(q, \dot{q}, t)}{\partial \dot{q}_i}$$

$$= \sum_j \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_j} \frac{\partial \dot{q}_j}{\partial \dot{q}_i} = \sum_j \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_j} \frac{\partial}{\partial \dot{q}_i} \left(\sum_k \frac{\partial \dot{q}_j}{\partial q_k} \dot{q}_k \right)$$

$$= \sum_j p_j \sum_k \frac{\partial \dot{q}_j}{\partial q_k} \delta_{jk} = \sum_j p_j \frac{\partial \dot{q}_j}{\partial q_i}$$

とおぼえれば、ハミルトニアン H は、

$$\begin{aligned} H &= \sum_{i=1}^N p_i \dot{q}_i - L = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \dot{q}_i \frac{\partial \dot{q}_j}{\partial q_i} p_j - L \\ &= \sum_{j=1}^N p_j \dot{q}_j - L \end{aligned}$$

とおぼえ、また $\dot{q}_i = \frac{d q_i}{dt}$ の表現

$$H = \sum_{i=1}^N p_i \dot{q}_i - L$$

を得る。つまり、 $\delta p_i \sim \delta q_i$ を条件とするとき、正準方程式が同じようになります。

$$\frac{\partial H}{\partial q_i} = -\dot{p}_i, \quad \frac{\partial H}{\partial p_i} = \dot{q}_i$$

正準率換

ハシットン力学の長所は、(一般化) 座標と(一般化) 運動量にともなうもごちやまぜにして、より一般的な率換を考へることはできるのである。

$$\{q_i, p_i, t\} \rightarrow Q_i = Q_i(p_i, q_i, t), \quad P_i = P_i(p_i, q_i, t) \quad \dots \textcircled{①}$$

もちろん、このような率換が"認められるわけではありません。物理的に意味のある率換のみを許すだけではあります。具体的には、変換体の Q_i, P_i が正準方程式

$$\dot{Q}_i = \frac{\partial H'}{\partial P_i}, \quad \dot{P}_i = -\frac{\partial H'}{\partial Q_i} \quad (H \rightarrow H') \quad \dots \textcircled{②}$$

を満たさなければなりません。そのためには H' が満たすべき条件についても考慮しなければなりません。この条件については、最小作用の原理にもとづくのがいちばんよい。それは、

$$\delta S = \delta \int_A^B (\sum_i P_i dq_i - H dt) = 0 \quad (\text{但し } A, B \text{ は } p_i, q_i \text{ の固定}) \quad \dots \textcircled{③}$$

である。同じようにして、

$$\delta S = \delta \int_A^B (\sum_i P_i dq_i - H dt) = 0 \quad (\text{但し } A, B \text{ は } p_i, q_i \text{ の固定}) \quad \dots \textcircled{④}$$

である。 $\textcircled{③}, \textcircled{④}$ が成立する条件は、

$$\sum_i p_i \dot{q}_i - H = \sum_i P_i \dot{Q}_i - H' + \frac{dF}{dt} \quad \dots \textcircled{⑤}$$

である。これを **率換の母関数** といふ。

F は一般に q, p, θ, β, t の関数である。つまり $F = F(q, p, \theta, \beta, t)$ である。だが一方で、 q, p, θ, β のうち独立な係数の組は 2つだけであるから、 F を 2つの組に階層化する。

$$F(\theta, \beta) \text{ or } F(q, p) \text{ or } F(q, \beta) \text{ or } F(\theta, p)$$

かつ $F = F(\theta, \beta) + F(q, p)$ である。

1. $F = W_1(q, \theta, t)$ のとき

もともと \dot{q}_i に考慮しているのは、 F の引数が q_i, θ, t だけであるとよい。このときは、(1) が

$$\sum_i P_i dq_i - H dt = \sum_i P_i d\theta_i - H' dt + dF$$

$$\therefore dW_1(q, \theta, t) = \sum_i (P_i dq_i - P_i d\theta_i) + (H' - H) dt \quad \text{--- (6)}$$

となる (6) が、

$$\frac{\partial W_1(q, \theta, t)}{\partial q_i} = P_i, \quad \frac{\partial W_1(q, \theta, t)}{\partial \theta_i} = -P_i$$

$$H' = H + \frac{\partial W_1(q, \theta, t)}{\partial t}$$

を得る。

2. $F = -\sum_i P_i \theta_i + W_2(q, P, t)$ のとき

つまり、 F が q, P, t の関数で引数として \dot{q}_i は含まれてない、となるが、このときは (6) がそのままでは q, P, t の全微分の形になり、となりない。よってこのままでは不適な点、ルジャンドル変換を適切にはどういふべきかはまだない。そこで、(6) を

$$d(F + \sum_i P_i \theta_i) = \sum_i (P_i dq_i + \theta_i dP_i) + (H' - H) dt \quad \text{--- (8)}$$

= $W_2(q, P, t)$ となる

となる、上の式は W_2 となる、となる

$$P_i = \frac{\partial W_2(q, P, t)}{\partial q_i}, \quad \theta_i = \frac{\partial W_2(q, P, t)}{\partial P_i}$$

$$H' = H + \frac{\partial W_2(q, P, t)}{\partial t}$$

となる。

$$3. F = \sum_i p_i q_i + w_3(p, q, t) \quad \text{⑥}$$

1, 2, 3 同じようにして

$$\begin{aligned} d(F - \sum_i p_i q_i) &= \sum_i (-q_i dp_i - p_i dq_i) + (H' - H) dt \\ &= w_3(p, q, t) \quad \text{とく} \end{aligned} \quad \text{--- ⑦}$$

とくればよい。つまり

$$q_i = -\frac{\partial w_3(p, q, t)}{\partial p_i}, \quad P_i = \frac{\partial w_3(p, q, t)}{\partial q_i} \quad \text{--- ⑧}$$

$$H' = H + \frac{\partial w_3(p, q, t)}{\partial t}$$

である。

$$4. F = \sum_i (p_i q_i - P_i Q_i) + w_4(p, P, t)$$

引数を座標 x や運動量 p に書き換えると、レジナルド変換が 2 回必要るのは
±4 つとなる結果となる。⑦より

$$\begin{aligned} d(F - \sum_i p_i q_i + \sum_i P_i Q_i) &= \sum_i (-q_i dp_i + Q_i dP_i) + (H' - H) dt \\ &= w_4(p, P, t) \quad \text{とく} \end{aligned} \quad \text{--- ⑨}$$

つまり

$$q_i = -\frac{\partial w_4(p, P, t)}{\partial p_i}, \quad Q_i = \frac{\partial w_4(p, P, t)}{\partial P_i} \quad \text{--- ⑩}$$

$$H' = H + \frac{\partial w_4(p, P, t)}{\partial t}$$

である。

* ①, ④, ⑦, ⑩ で 4 つあるのに、

$$H' = H + \frac{\partial w}{\partial t} \quad \text{--- ⑪}$$

これは、形も同じである。ところが、 w に t に ± 4 つある。 $H = H'$ である。

正準率数とボアソン指弧

二通り、一般化座標 q_i で、これにともない一般化運動量

$$P_i = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i}$$

を考えました。ところが、今までよくやがったように、ハミルトン力学ではモードやとが本質的差違ともモード数学的にも、つまり、ここで、新たに正準率数の定義といえ、一般化座標 Q_i, P_i を

$$\dot{Q}_i = \frac{\partial H'}{\partial P_i}, \quad \dot{P}_i = -\frac{\partial H'}{\partial Q_i} \quad \dots \quad (15)$$

とみなす変数の組として定義したほうが、より自然です。

命題1 f, g が正準率数 Q_i, P_i の関数であるとする。このとき、新たに正準率数を $\Theta = \Theta(Q_i, P_i, t), \Gamma = \Gamma(Q_i, P_i, t)$ にみて定めよとす、以下が成立する。

$$\{f, g\}_{Q_i, P_i} = \{f, g\}_{\Theta, \Gamma} \quad \dots \quad (16)$$

すなはち、ボアソン指弧は正準不変量である。

(証明) まず、

$$\begin{aligned} \{f, g\} &= \sum_i \left(\frac{\partial f}{\partial q_i} \frac{\partial g}{\partial P_i} - \frac{\partial f}{\partial P_i} \frac{\partial g}{\partial q_i} \right) \\ &= \sum_i \left(\frac{\partial f}{\partial q_i} \sum_j \left(\frac{\partial g}{\partial Q_j} \frac{\partial \Theta_j}{\partial P_i} + \frac{\partial g}{\partial P_j} \frac{\partial \Theta_j}{\partial q_i} \right) - \frac{\partial f}{\partial P_i} \sum_j \left(\frac{\partial g}{\partial Q_j} \frac{\partial \Theta_j}{\partial q_i} + \frac{\partial g}{\partial P_j} \frac{\partial \Theta_j}{\partial q_i} \right) \right) \\ &= \sum_j \frac{\partial g}{\partial Q_j} \left(\sum_i \left(\frac{\partial f}{\partial q_i} \frac{\partial \Theta_i}{\partial P_i} - \frac{\partial f}{\partial P_i} \frac{\partial \Theta_i}{\partial q_i} \right) \right) + \sum_j \frac{\partial g}{\partial P_j} \left(\sum_i \left(\frac{\partial f}{\partial q_i} \frac{\partial \Theta_i}{\partial P_i} - \frac{\partial f}{\partial P_i} \frac{\partial \Theta_i}{\partial q_i} \right) \right) \\ &= \sum_j \frac{\partial g}{\partial Q_j} \{f, \Theta_j\}_{Q_i, P_i} + \sum_j \frac{\partial g}{\partial P_j} \{f, \Theta_j\}_{Q_i, P_i} \end{aligned} \quad \dots \quad (17)$$

となる。

次に、

$$\{Q_i, Q_j\}_{Q_i, P_i} = 0, \quad \{P_i, P_j\}_{Q_i, P_i} = 0, \quad \{Q_i, P_j\}_{Q_i, P_i} = \delta_{ij} \quad \dots \quad (18)$$

を仮定する（もちろんこれは実際には成立する）。

するときの式, ⑦式

$$\{f, g\}_{q,p} = \sum_i \frac{\partial g}{\partial \theta_i} \{f, \theta_i\}_{q,p} + \sum_i \frac{\partial g}{\partial p_i} \{f, p_i\}_{q,p} \quad \text{--- (19)}$$

にあたり $f = \theta_k, p_k$ を代入してみると, ⑦式は

$$\{\theta_k, g\}_{q,p} = 0 + \sum_i \frac{\partial g}{\partial p_i} \delta_{ik} = \frac{\partial g}{\partial p_k}$$

$$\{p_k, g\}_{q,p} = - \frac{\partial g}{\partial \theta_k} + 0$$

となる. したがって, $g = f$ のときの式は,

$$\{\theta_k, \theta_l\}_{q,p} = - \frac{\partial f}{\partial p_k}, \quad \{f, p_k\}_{q,p} = \frac{\partial f}{\partial \theta_k} \quad \text{--- (20)}$$

となる. つまり, ②式を ④式に代入する,

$$\{f, g\}_{q,p} = \sum_i \left(\frac{\partial g}{\partial p_i} \frac{\partial f}{\partial \theta_i} - \frac{\partial g}{\partial \theta_i} \frac{\partial f}{\partial p_i} \right) = \{f, g\}_{q,p}$$

となる. 以上より, 証明は示された. (証明終)

基本括弧式

前の証明では, 正準変数 θ_i, p_i が "q, p のホーリン括弧" ⑤式の交換関係を満たすことを仮定した. もう少し, この一般に成り立つ事実である.

正準変数 q, p が, 新たな q, p を $Q = (q, p, t)$, $P = P(q, p, t)$ として定めたとする. さて, まず,

$$\{q_i, q_j\}_{q,p} = 0, \quad \{p_i, p_j\}_{q,p} = 0 \quad \text{--- (21)}$$

$$\{q_i, p_j\}_{q,p} = \delta_{ij}$$

は自明である. ところが, これだけではよく, 一般に, Q, P が正準変数ならば,

$$\{q_i, \theta_j\}_{q,p} = 0, \quad \{p_i, p_j\}_{q,p} = 0 \quad \text{--- (22)}$$

$$\{q_i, p_j\}_{q,p} = \delta_{ij}$$

も成り立つ. これは ⑥式の主張と矛盾する. ところが, この逆も成り立つことが分かる. つまり, ②式が成り立つとき, P, Q は正準変数である.

命題2 q_i, p_i を正準率数の組といい、関数の組

$$Q_i = Q_i(q_i, p_i, t), \quad P_i = P_i(q_i, p_i, t)$$

が $\dot{q}_i + p_i \frac{\partial}{\partial t} = 0$ とします。このとき、以下の一回微分関係が成り立つ。

$$\left(Q_i, P_i \text{ が 正準率数の組} \right) \Leftrightarrow \begin{cases} \{ Q_i, Q_j \}_{q,p} = 0 \\ \{ P_i, P_j \}_{q,p} = 0 \\ \{ Q_i, P_j \}_{q,p} = \delta_{ij} \end{cases}$$

上の命題の証明は一般にめんどうなもので、ここでは省略する。一率数の組 ($i=1$) だけが
成り立つのもさうが、一率数だけやるのも微妙すぎ、後回しにする。